

# アウグスティヌスにおける言語記号の概念——『教師』をめぐる一考察

細谷 久子

## 要旨

Prétendant, d'une part, que « nul enseignement n'est possible sans signe », et d'autre part, que « nous n'apprenons rien au moyen des signes », Augustin traite minutieusement de la nature du signe linguistique, en utilisant la métalangue séparée de la langue courante. Dans l'antiquité grecque, *le signe* (σημειον) était analysé dans le domaine philosophique, et divisé en deux parties, c'est-à-dire « signifiant (σημαινον) / signifié (σημαινομενον) ». La théorie d'Augustin a succédé à la semiologie grecque, mais chez Augustin, l'objet de l'analyse passe de l'énoncé au mot. Il a, ensuite, proposé la notion d'une paire « verbum / nomen », qui s'associent et forment ainsi le nouvel objet, *le signe en tant que signe linguistique*. En outre cette nouvelle paire s'est élevée à l'idée intellectuelle formée par les deux parties « sensible / intelligible », une seule partie n'étant pas suffisante pour que les hommes se comprennent. Nous concluons donc que les deux énonciations contradictoires d'Augustin signifient la nature inséparable du signe linguistique.

キーワード：言語記号の二重性，メタ言語，記号と実在の乖離性，記号の定義，シニフィアン・シニフィエ

## 1. はじめに

『教師』<sup>1)</sup>の冒頭でアウグスティヌスは、「語る loqui のは何のためか」と問う。この対話篇でアウグスティヌスに対峙するのは息子アデオダトゥスであるが、彼は「教える docere」および「学ぶ discere」ことが語る目的であると答える。アウグスティヌスは「学ぶこと」を斥け、「教えること」すなわち「言葉 verbum によって想起すること」こそがその目的であると説く。アウグスティヌスの論旨によれば、「語る」とは言葉を用いることであり「言葉」とは「記号 signum」であることから、「記号を用いるのは何のためか」と問いなおすことができるだろう。アウグスティヌスの答えは「教える」ためであるから、そこから「記号に依らずして教えることはできない」が、他方、「記号からは何も学ばれない」という結論が導かれる。というのも、記号は何かを想起させるのに必要不可欠であるにも関わらず、実際にはそれを想起させるのみに留まるからである。

このようにアウグスティヌスは、否定という形式を採ることで「教える」と「学ぶ」を対立させ、そのなかで言語記号を検討しようとしている。ここで、「教える」とは発話者から受信者へと言葉を発する行為であり、「学ぶ」とは受信者が発話者の発した言葉を受け取り理解する行為であることを確認しておきたい。「教える」「学ぶ」は、言語の伝達機能を前提としており、教父アウグスティヌスの『教師』においてはとりわけ『聖書』の正しい解釈を目的とした背景が用意されている。そうした図式の中で二人以上の人の間に介在する「言葉」すなわち「記号」が詳細に吟味されるのだが、そこで繰り返し説明される言語記号の性質から、アウグスティヌスを現代言語学の先駆者と見る向きもある。本稿では、言語論のみに的を絞り、アウグスティヌスの記号概念を丁寧に読み解くことから始めたい。記号の指し示しているものは何なのか、また記号が記号しか指し示さないならば、記号とは何なのか。このようなアウグスティヌスの基本概念を整理し、西洋古代におけるアウグスティヌスの記号論の位置づけを確認することで、言語記号としての「記号 *signum*」の姿とその不可分の二重性を明らかにすることが本稿の目的となる。

## 2. 記号と実在

### 2. 1 記号の指し示すもの

アウグスティヌスの問題提起は、「語ること」の意義を問うことから出発する。冒頭で述べたように、アデオダトゥスは「教えること」ないしは「学ぶこと」がその意義であると答えるが、アウグスティヌスは「学ぶこと」を「語ること」から区別する。アデオダトゥスは、例えば「尋ねる」(＝語る) 場合の目的は「学ぶこと」であると反論するが、アウグスティヌスはそれさえも「知りたいと思っている事柄」を相手に知らせる(＝教える) ことだと断言する。さらに「祈ること」も祈りの言葉による自己想起であるので、かくして「語る」とは「教えること」すなわち「想起させること」であるという共通の理解に両者は到達する。

そしてわれわれが「語る」とき、常に「言葉」が用いられる。つまり、語られた「言葉」は何かを想起させる、すなわち「言葉」は何かを指し示すのであり、その結果「その記号であるところのもの」が精神へともたらされる<sup>2)</sup>。「記号 *signum*」とは「何かを指し示すもの」であるから、「言葉 *verbum*」が「何かを指し示す」ならば、「言葉」と「記号」は等式で結ばれることになる。

では「言葉＝記号」は何を指し示しているのだろうか。アウグスティヌスはウェルギリウスの叙事詩の一節から単語を取り出し、とりわけ *nihil* と *ex* について詳細に検討する。まず、否定辞の *nihil* は「存在しない」という意味であるから、*nihil* という記号は「存在しないもの」を指し示す、すなわち何も指し示すことができない。しかしアウグスティヌスは、「存在していないものが指し示されているというよりは、むしろ、ある心の状

態が指し示されている」<sup>3)</sup>と換言し、すべての記号がなんらかを指し示すことを論証する。次に前置詞の *ex* について、アデオダトゥスは同義語の *de* を用いて言い換えたり、その意味<sup>4)</sup>を説明することでその指し示すところを言い表わそうと試みるが、このアデオダトゥスの説明そのものが明らかにしているように、「言葉」が他の「言葉」によって指示されているにすぎない。アウグスティヌスは、記号が「記号」ではなく「実在」を指し示すことの可能性に執着し、議論は「身振り」へと展開するが、その伝達能力に関わらず、「身振り」自体もまた「何かを指し示すもの」＝「記号」であり、従ってたとえ *ex* を身振りで指し示すことが可能であっても「記号 (*ex*) を記号 (身振り) で指し示す」ことにほかならない。アウグスティヌスは『教師』の冒頭で「語る」目的を問うているが、そもそも「語る」とは「言葉を発すること」であり、従って言葉＝記号は「記号」を指し示すことしかできないのである。

なぜなら、われわれが語っている場合、記号を作っているのであり、そこから指し示すという言葉が派生しているのだから。

*Cum enim loquimur, signa facimus, de quo dictum est significare.* <sup>5)</sup>

ラテン語の「*significare* (指し示す)」という語の形態から明らかなように、「指し示す」とは「記号を作る *signa facimus*」ことであり、「語る」とは教えるため想起させるために言葉という記号を用いて「指し示す」ことであるから、われわれが何かを語るときあるいは教えるとき、つねに記号を用いて他の記号を指示しているのである。

## 2. 2 記号に指し示されるもの

ここまで「教える」という行為に基づく議論の展開を見てきたが、『教師』の中ほどから「指し示されるもの」へと視点が移り、「学ぶ」という観点から「記号」概念に精査が加えられる<sup>6)</sup>。*nihil* であれ他の言葉であれ記号を耳にした人は、その記号から何を心得のだろうか。アウグスティヌスは「人間は、人間であるか? *utrum homo, homo sit?*」という一文を例にとり、「人間 *homo*」という語について二通りの解釈を提示する。「人間 *homo*」は *ho-mo* という二つの単なる音であると同時に一つの名詞であるという解釈と、他方、より自然に通常われわれの会話の中で指示されるのは、動物の種としての「人間 *homo*」という意味解釈である。双方ともに「人間 *homo*」に指示されているのには違いないが、前者は「人間 *homo*」という記号について問われた場合に、後者はそれによって指し示されるもののものを問われた場合に成立する解釈である。しかし、質問者のそのような意図が明瞭でない時、われわれは後者の解釈を優先するのが自然である。つまりこの問答でアウグスティヌスが注意を喚起しているのは、「人間 *homo*」という記号が「実在 *res*」そのものを思い巡らせる重い法則のようなものが存在しているということ

である。

しかしながら、後者の場合においても「実在そのもの」が指示されていないのは自明のことであり、こうしてアウグスティヌスは「記号」と「実在」との間に媒介として「知識」を設定する。われわれは「実在 res」を指し示そうとして記号を用いるが、記号に指し示されているものは実在ではなく、実在へと思いを巡らせうる知識にすぎない。「知識」は「実在」ではないから、やはり「実在を指示するもの」すなわち一種の「記号」として分類され得る。つまり、「記号」が「実在の知識」を示すとは、換言すれば「記号」によって別の「記号」が示されるのであって、言語活動においては永遠にその連鎖から抜け出すことはできない。記号の指し示すものについても同様の結論が導かれたわけだが、そのような連鎖から脱して、われわれはいかにして記号に指し示される「実在の知識」を得るのか。アウグスティヌスが「記号によっては学ばれない」と断言するのは、まさにこの点においてなのである。

ここで前半の議論を振り返って少し確認しておこう。アウグスティヌスは、「語る」とは「想起する」ことであり、われわれは記号を用いなければ「教える」ことができない、すなわち記号が「想起させる」役割を担うと考えていた。しかし、記号によって指し示されているのは「実在の知識」であるから「実在を想起させるもの」と換言可能であろう。「想起する」とは既に在るものに対して働きかける力である。実際、アウグスティヌスは、人が記号を耳にした時、その指し示されるところのものを知っていなければ認識に至らないと説明する。すなわち記号からは何も学ばれないという帰結に至るのである。

### 2. 3 記号を指し示す記号

これまで見てきたように、「教える」「学ぶ」をキーワードとしてアウグスティヌスが考察の対象としているのは「記号によって指し示される記号」であるが、ここで混乱を避けるために「記号を指し示す記号」を見分けなくてはならない。言葉について同じ言葉を用いて語るという行為においては、その次元の違いを意識することが重要である。アウグスティヌスはメタ言語という領域を方法論的に識別することの必要性を十分に認識し、独特の仕方で分離してゆくのである。まず、アウグスティヌスは第一章七節以降、記号を言葉（記号）によって指示される「言葉（記号）」と「言葉以外の記号」に二分する。アウグスティヌスは「身振り」や「文字」という言葉を例証し、これらの言葉は〈身振り〉、〈文字〉という事柄を指示する「言葉（記号）」であるが、指示される事柄としての〈身振り〉や〈文字〉<sup>7)</sup>自体は、言葉ではないが何かを指示するものに違いないので「言葉以外の記号」に分類される。これは前節で確認した指示関係に準拠するならば、「知識」に相当するものである。そして次に、「nomen（名詞・名前）」について精査を始める。「名詞」は、たとえば「ロムルス」「ローマ」「河」「徳」などさまざまなものを指示し、それらは各々〈ロムルス〉〈ローマ〉〈河〉という可視的なものあるいは〈徳〉

という知性的なものを指し示すことができる。そしてさらにその「nomen (名詞・名前)」を指示するものとして「verbum (言葉)」を布置する。ここまでの「nomen (名詞・名前)」に関する議論を振り返って図式化すると、語の指示関係は次のようになる。

「verbum」 → 「nomen」 → 「ローマ」 → 〈ローマ〉

カギ括弧で示した語が「言葉 (記号)」であるが、「verbum (言葉)」と「nomen (名詞・名前)」は共に他の「言葉 (記号)」を指し示すことが可能な立場にあり、「ローマ」のような名詞とは区別され特殊性を獲得していることがわかる。

前者をさらに分析すると、「verbum (言葉)」は「言葉」そのものをも指し示すことができる。「nomen (名詞・名前)」および「signum (記号)」に関しても同様のことが確認できるので、自分自身をも指し示すことのできる記号としてこれらの三つを抽出し、それらのうち「verbum (言葉)」と「nomen (名詞・名前)」はお互いを指示しあう記号であることを根気強く論証してゆく。このようにアウグスティヌスが執拗に思えるほど行きつ戻りつしながら区別しようとしているのが、メタ言語的概念である。メタ言語は分析の対象となる言語と同一であるため、その違いを明確に使い分けなければ正確な理解も得られない。しかし、「言葉」について語るとき避けては通れない試練でもあり、その半ばでアウグスティヌス自身がそのもどかしい心境を吐露している。「……もつとも、わたしがわたしののぞむ通りにそれについて語ることができるならばの話だが。なぜなら、一つの言葉を他の言葉で論ずるということは、[たとえば] 片方の指の間に他方の指を入れて摩擦して、どちらの指がむずがゆく、どっちの指が[他の指を] むずがゆくさせているのか、当の本人以外に識別できないのであるが、それを識別する以上に混み入った問題なのだ」<sup>8)</sup>。同じ体系に属す言葉を用いて言葉について語るのは大変入り組んだ作業であるので、それを用いている本人でさえ注意を欠くと混乱をきたすことになる。アウグスティヌスはアデオダトゥスに対し、ここで述べられていることがらについて用いられる言葉の次元に細心の注意を払うよう求めているのである。つまりここでメタ言語を用いて説明が試みられているのは記号の本質であり、実際、「verbum (言葉)」と「nomen (名詞・名前)」の分析から、アウグスティヌスは記号の二重性へと展開してゆくのである。

### 3. 記号の二重性

#### 3. 1 耳を打ち、精神に作用する記号

言葉は「言葉」と「言葉以外の記号」を指し示すことから、アウグスティヌスは前者を聴覚的なもの、後者を視覚的なものに分類した。既に確認したが、「ローマ」(聴覚的な記号)と〈ローマ〉(視覚的な記号)の区別にみられるように、後者は「記号」によって指示された記号ではない何かであり、アウグスティヌスはこれらに「significabilia (可指示的なもの)」という名を新たに授けている。この名称から、「記号 signum」が「指示

するもの」すなわち能動的な立場にあるのに対し、「可指示的なもの *significabilia*」は「指示されるもの」すなわち受動的な役割を担うことは明らかだ。

そして、さまざまな記号の中から三つの記号に特権を与えたアウグスティヌスは、「*verbum* (言葉)」と「*nomen* (名詞・名前)」をメタレヴェルにおいて同格に扱い、双方に重要な役割を付与する。

何らかの意味をもった音節として発せられる声によって表現されるすべてのものは、感覚されるよう耳を打ち、知られるように記憶に刻み込まれる……。だから、われわれがそのような声によって何かを表現するとき、いつも二つのことがらがおこるわけだ。……それらの二つのうち一つが「言葉」と呼ばれるとすれば、他は「名詞」と呼ばれるわけだが、「言葉」(*verbum*)はすなわち「打つ」(*verberare*)から、「名詞」(*nomen*)は「知る」(*noscere*)から派生しており、前者は耳に関係することがらで、後者は魂に関係することがらであるのでそう呼ばれるようになったのだろう……。<sup>9)</sup>

これらの語の派生関係の真偽はさておき、ここからアウグスティヌスの考える言語記号のかたちが浮かび上がる。記号が発せられたとき常に二つのことがらが生じるのだが、一方は聴覚に、他方は精神に関することである。つまり記号とは各々聴覚と精神に作用する二つのものから成ると解釈できるのである。さらに詳細に検討すれば、「われわれがそのような声によって何かを表現するとき、いつも二つのことがらがおこる」という部分について、傍点部分の原文 (*Duo ergo quaedam contingunt*) の動詞 *contingo* は一義的に「触れる、接する」という意味をもつ。すなわち言葉が発せられた瞬間に、聴覚的なことと精神的なことが「境を接する＝結ばれる」というイメージを喚起させるのである。

しかしながら、これまでの議論において「言葉」と「名詞」が相互に指し示す記号として完全に同格と見なされたわけではない。すべての名詞は言葉であってもすべての言葉が名詞とはいえない、と疑問を呈するアデオダトゥスに、アウグスティヌスは文法概念から名詞以外の品詞についてある種の分析を促す。たとえば、接続詞を「*et, que, at, atque*」といくつか上げ、「これらすべて *haec omnia*」と代名詞で置き換えても言語使用の観点から誤りではないし違和感は生じない。また、命題は常に正しい文章として扱われるが、その基本形式は動詞＋名詞である。アウグスティヌスは、動詞であれ接続詞であれ命題において文脈上名詞の位置に代入可能なものは「名詞 *nomen*」と言い得るのではないかと問いかける<sup>10)</sup>。つまり、すべての品詞は「名詞」であり、従ってすべての言葉は「名詞」であると結論付けられる。ここでアウグスティヌスは再度「*nomen*」を取り上げ、交換概念として「名称 *vocabulum*」を提示する。これまで *verbum* と *nomen* の関係について考察してきた中で、アウグスティヌスは *nomen* に明らかに二重の意味を付加し

ていた。一方は文法的分類に属す「名詞」、他方は一般的意味の「名前」であるが、ラテン語では双方共に *nomen* で指示できることから、後者を分離するためにメタレヴェルで「名称 *vocabulum*」という呼び名を示しているのかもしれない。しかしアウグスティヌスがここで強調しているのは、これらの語が「音」を除けばなんの違ってもたない語である、すなわち「交換概念」という側面である。

ここで、これまでの記号理論を整理しておくと、「記号によって示される記号」として注目されたのは「記号 *signum*」「言葉 *verbum*」「名詞・名前 *nomen*」「名称 *vocabulum*」の四つで、これらの関係は次のようになる。「記号」はこれらの語を指し示すと同時にこれらによって指し示されるもするが、その概念は他の語を包含しそれらの上位に位置する。「言葉」と「名詞・名前」はお互いに指示しあい完全に同格の立場を有するが、等記号で結ばれはしない。というも各々「言葉」は感覚に、「名詞・名前」は精神に作用するという特徴を持つからである。そして「名詞・名前」と「名称」は、前者が「名前」という概念を示す限りにおいて、完全に一致し「音」意外に何の違っても持たない交換概念とされる。つまり、ここで明確に分離されたのは *signum* と *verbum* のカテゴリーのように思える。例えば「ローマ」という聴覚的なものが指し示すものは〈ローマ〉という視覚的なもの（あるいは「徳」であれば〈徳〉のような知的なもの）であったが、これらは「指し示すもの *signum* / 指し示されるもの *significabilia*」として対をなしていた。しかし、この「ローマ」と〈ローマ〉が、ここで *verbum* と *nomen* の関係に置き換えられたとすれば、聴覚的な「ローマ」と視覚的（知的）な〈ローマ〉が一つの記号としてのローマを形成していると説明できる。すなわち、一般的な意味における「*signum*（指し示すもの）」から、*verbum* と *nomen* を構成要素として内包する「*signum*（言語記号）」が、区別されたのではないだろうか。

### 3. 2 記号の知識と実在の知識

*verbum* と *nomen* の関係からメタレヴェルで一般化された記号の概念は、別の角度からも論じられることになる。アウグスティヌスは「人間 *homo*」という記号を検討するなかで「記号」が指し示しているものは決して「実在 *res*」そのものではなく、実在を思い巡らせるものでしかないことを確認し、それを記号と実在の仲介者として「知識」と呼んだ。そしてこれらを価値という観点から関係付けてゆく。アウグスティヌスの原則は「他のもののために存在するものの方が、それがそのもののために存在するものよりも価値が少ない」<sup>11)</sup>である。したがって、「記号」よりも「記号によって指し示されるもの」の方が価値が高いといえる。なぜならば、「記号によって指し示されるもの」は「記号」のために存在するのではなく、反対に「記号」が「指し示されるもの」のために存在するからである。ここでアウグスティヌスは「指し示されるもの」を *res quae significantur* と表現しており、これを「実在 *res*」と解釈したアデオダトゥスは忌むべき

実在の例（汚物 *coenum*）を挙げて、そのような実在に関しては実在よりも記号のほうが不快感を与えないため優れていると主張する。しかしアウグスティヌスが *res* で示していたものは「知識」であり、既に確認した議論（「記号」の示すものは「実在」ではなく「実在を想起させるもの」すなわち「知識」であったこと）をアデオダトゥスに再認識させるのである<sup>12)</sup>。つまりここでアウグスティヌスが重視していたのは「記号」と「実在」の関係ではなく「記号」と「知識」の関係であり、前者より後者により高い価値を認めている。そして、「知識」はさらに「実在の知識」と「記号の知識」に分離され、ここに「実在」「実在の知識」「記号の知識」「記号」の四つが識別される。この二つの「知識」に関しては、結論からいえばその優劣の決着は保留されるが、いずれにせよ「知識」が「記号」に優るのは変わらない。

一方、再度指示関係から二つの知識の関係を確認してみよう。記号と実在の指示関係から、「記号の知識」が「実在の知識」を指し示すという図式が成立する。すなわち、「記号」はその「知識」を指示し、「知識」はその「実在」を指し示す。さらに「知識」は「指し示す知識」と「指し示される知識」に区別されるのである。これは前節で一般化された記号における *verbum* と *nomen* の関係を補強するように思われる。記号と実在の間には埋めようのない隔たりがあり、われわれの認識には「記号」という仲介者が必要である。「記号」は「知識」を指し示し「知識」は二つのもので構成されている。再度「人間 *homo*」についてみて見ると、一方は [ho-mo] という音声すなわち「記号の知識」であり、他方は「人間」という「実在を思いめぐらす知識」なのである。これまで見てきた記号の二重性は「教える」という行為に基づいた分析であり、これらの記号概念からは「学ぶ」仕組みは見えてこないが、記号は認識されてこそ「知識」となる。次に、認識に視点を置き換えた記号の分析を考察しよう。

### 3. 3 音と意味

「記号によっては何も学べない」ことを明らかにするため、アウグスティヌスはラテン語の単語「*caput*」を例示する。この語を初めて耳にした人にとって「*caput*」は音声 [ca-put] 以外の何ものでもない。幸い「*caput*（頭）」は視覚で確認することができるので、指で指し示すことによってわれわれはその記号を学ぶことができる。つまり、記号を学ぶには、例えば「*caput*」の音声に対し、その指し示すところの意味内容を伴うことが不可欠で、すなわち一方のみでは記号は学ばれないのである。

……記号の中には二つのもの、つまり、音と意味とがあるのでわれわれは確かに音のほうは記号によって認識するのでなく、まさに耳を打つ音そのものによって知るのである。しかし、意味のほうは、指し示されているもの（実在）を見ることによって知るのである。なぜなら、指の指示によっては指が指し示すもの以外のものを

意味することはできないから。そして、指し示されるものは記号ではなく、「頭（カーブット）」と呼ばれるところの肢体〔の一部〕なのである。<sup>13)</sup>

ここでも、アウグスティヌスが「記号」と「音」という概念を明確に区別していることが確認できる。何かを指し示す「記号」と指し示される「意味」という対立軸も存在することから、「記号 *signum*」は多義的に用いられているが、しかしながらここで示唆されている記号の概念とは、「音」と「意味」の組合せによって生成され一方のみでは成立しない「記号」である。アウグスティヌスの言葉を借用するなら「わたしがそれ〔实在〕を発見するまでは、その言葉は私にとって単なる音にすぎない<sup>14)</sup>、すなわちそのような言葉からは「何も学ばれない」のである。

「記号からは何も学ばない」とは、すなわち記号と实在の乖離性を語っていることに他ならない。記号と实在の間には隔たりがあり、従って記号は指し示し想起するのみなので实在の認識には至らないのである。そこでアウグスティヌスは上で述べたように实在の認識を視覚に委ねるが、前半の議論からすれば矛盾が生じてくる。「記号がなければ何も教えられない」ことを証明するなかで、例えば、「歩く」という言葉を教えるために歩いてみせるとき、それを見た人が正確にその概念を理解することは困難だという結論が導かれている。その動作で示そうとしていることよりも実際には多くの情報(例えば、「急いでいる」とか歩いた「距離」など)が含まれていて、それらが「歩く」という概念に付加されかねないからである<sup>15)</sup>。しかし、記号を用いずに何かを教示する可能性について論じるなかで、熟練した腕のよい「鳥刺し」とそれに非常な関心をよせて注視する観察者を例証し、後者が「聡い *intelligens*」者であれば補鳥術の全貌を会得することが出来る<sup>16)</sup>と転換されている。従って、アウグスティヌスの实在認識には「見る *videre*」ことと「知性 *intellectus*」が深く関与していると考えられる。

そこで、アウグスティヌスの認識論を確認しておこう。言葉を耳にしたとき、われわれは二つの仕方で、すなわち「身体の感覚 *sensus corporis*」と「精神 *mens*」によって認識するのだが、前者は「感覚的なもの *sensibilia*」、後者は「知的なもの *intelligibilia*」と換言される。感覚的な認識について、实在そのものが視野にあるとき、われわれは实在を「見ること」すなわち感覚によって学ぶ。しかし实在が感覚にさらされていないとき、あるいは以前に見知った实在に関しては、实在によって記憶に刻まれた「心像 *imago*」によって再認識する。一方、知的な認識とは、精神 *mens* すなわち知性 *intellectus* あるいは理性 *ratio* による認識のことで、語るという行為においては『内なる人』が照らされ享受するところの真理のあの内的な光の中でわれわれが直接に見ること、聴き手にとっては「内奥の澄みきった目をもってそれらを見るとすれば、……自身の観想〔*contemplare*〕によって」認識されるのである<sup>17)</sup>。「観想する *contemplare*」とは羅仏辞書によれば *regarder attentivement, observer, contempler* という意味であり、「見る」ことに他

ならない。外的な感覚機能である視覚に光が欠かせないように、内的な知性による観想にも内的な光が不可欠である<sup>18)</sup>。光とは真理すなわち神と同義であることから、永遠かつ完全なものと見なされる。従って、精神が光に相談しても知解へと至らないとき、それは真理に欠陥があるのではなく、自らの能力が欠けているということである。そして、見ることのできない対象について、アウグスティヌスは信ずる *credere* ことが知解へと導くと述べる。というのも、「信じる」ことは人を探求へと向かわせるからである。すなわちこの探求こそが「観想する」ことに他ならない。われわれの認識するものすべてが、感覚的（外的）視覚に現われるわけではない。観念的なものもあれば未知のものも存在するが、そのような対象に対峙したとき、探究することで知的な認識へと近づくことができるのである。

ここで、「記号によっては何も学ばれない」という主張に戻ると、上述のような知性の働きから得る記号の意味内容が伴われなければ伝達機能は保証されない、と換言できるのではないだろうか。実際にアウグスティヌスは、音と意味の結びつきが多様で不安定なことから生じる情報伝達の特殊なケースをいくつか挙げている。例えば、語る人が内容を理解していないからといって、その発話が必ずしも聴き手の理解を妨げるものではない。また言葉の多義性によって、語る人の望む内容と異なる意味を理解するというのも珍しいことではない<sup>19)</sup>。アウグスティヌスの記号論には、記号の二重性のみならずその不可分が原理として語られているのではないだろうか。

#### 4. 記号の定義

##### 4. 1 アウグスティヌスに至る記号理論

記号には「何かを指し示すもの」というごく一般的な解釈のもとにさまざまな種が存在するが、「言語記号 *signum*」という概念はこれまで見てきたようにアウグスティヌスによって分離され広く定着したと考えられる。「記号 *signum*」はもともと古典ギリシャ語の *σημειον* に由来するが、そもそも西欧の伝統における記号とはどのようなものであったのだろうか。エーコ<sup>20)</sup>によれば、*σημειον* は紀元前5世紀頃には哲学用語として用いられ「証明、糸口、症候」という意味を有していた。当時、「語」には *ονομα* が用いられ、プラトンやアリストテレスによって二重性（意味作用と指示）の観点から分析されているものの、「語」に *σημειον* という名が用いられることはなかった。ストア学派はその二重性を *σημαινον*（表現）／*σημαινομενον*（内容）と明確に区別し<sup>21)</sup>、記号論と言語理論を関連づけはしたが、やはり「語」を「記号」と明言するに至っていない。このように微妙な関係性において発達していた「記号理論」と「言語理論」を結びつけたのがアウグスティヌスである、とエーコは考えている。

上述のとおり、古代から探究されてきた「指し示すもの *σημαινον*／指し示されるもの *σημαινομενον*」という対立概念に関し、ストア学派の分析を中心にもう少し詳しく見て

みよう<sup>22)</sup>。ストア学派は哲学の一部門として言論に関する学を見分け、そこからさらに、弁論と問答法の二つの学問を区分している。そして、問答法の扱う分野はクリュシッポスにより、「指し示すものσημαινον／指し示されるものσημαινομενον」へと二分される。この区分は「音的なもの／意味的なもの」という概念区分とも重なり、実際のところ、ストア学派の「指し示すもの」は、さらに「φωνη（音声）－λεξις（言葉）－λογος（文）」の三種に分類されている。この分類のカギになるのは分節されているか否か、意味作用をもたらすか否かの二点である。φωνηは未分節で意味作用をもたらす以前の一種の「声」のようなもので、人に限らず動物の声もその範疇に含んでいる。そしてλεξιςは分節された音声であるが意味作用をもたらさないもの、λογοςは分節されていて意味作用をももたらすものと定義付けられていた。この分類が示すように、ストア学派が有意義な単位として、すなわち言語のレベルとして分析の対象としていたのはλογος（文）だったのである。一方、ストア学派の「指し示されるもの」は、「理性的な表象にもとづいて存在しているもの」としてλεκτον（語られること）と呼ばれ、こちらもさらに完全なλεκτονと不完全なλεκτα（λεκτονの複数形）に分類されている。例えば「書く」という表現からは「誰が」書くのか不明である。つまりこれが不完全なλεκταで文の一部分でしかないのに対し、「ソクラテスが書く」というような表現は一つの命題を形成している文なので完全なλεκτονであると説明されている。「指し示すものσημαινον／指し示されるものσημαινομενον」のこのような分類が明瞭に示しているのは、ストア学派の関心が命題のような文の単位に寄せられているということである。「指し示すもの」と「指し示されるもの」が有意味なものとして一体化するのはλογοςとλεκτονにおいてであり、これらを構成する要素の総体が言語であると看做されていたのである。しかし、この分類はアレクサンドリア学派によって解釈し直されることになる。アレクサンドリア学派はストア学派による「指し示すもの」の三つの分類を「文字－語（λεξις）－文」に転換し、「文を構成するもっとも小さな部分」としてλεξιςに「語」の役割を与え、有意味の単位を文から語へと移行した。さらにラテン文法家たちはギリシャ語のλεξιςを dictio と訳し、「語」として定義している。ストア学派の分析は難解なものであったため古代からそれを明瞭化しようとする試みが続き、以上のような過程を辿った結果、「指し示すもの／指し示されるもの」の分析対象が、「文」から「語」へと移行したと考えられている。しかしながら、エーコも強調するように、記号σημειονと語根を同じくする用語（σημαινον／σημαινομενον）を言語分析に用いていたにもかかわらず、ストア学派は決して「記号σημειον」を「言葉」として明記することはなかったのである。

反対にアウグスティヌスは「言葉は記号である」という立場をとり、記号の総体が言語であると考えていた。そして、ストア学派のλογος－λεκτονに対し、dictio－dicibile という対の用語を見い出している。既に確認してきたように、ストア学派のλογος－λεκτονは「指し示すもの／指し示されるもの」の関係にあり、有意味単位の「文」に基づいた

観念であった。このレベルに満たない段階における「指し示すもの／指し示されるもの」の結合は、意味的な不安定さを伴うため分析の対象から除外されていたのである。しかしながら、後続の哲学者や文法家らにより、分析の関心は文の最小構成要素としての「語」へと移行し、ストア学派が分析単位として認めることのなかった *λεξις* (言葉) に *dictio* というラテン語が与えられ、新しい分析対象が誕生することになった。アウグスティヌスは、ストア学派のギリシア語動詞 *λεγω* (言う) に由来する対立軸 *λογος* - *λεκτον* と同様に、*dictio* に対して語根を共有する用語を求め、ラテン語動詞 *dicere* (言う) を元にしてその対立項に *dicibile* という造語をあてたと考えられている。「従って、*dicibile* は一般的な意味における指し示されるものではなく、語〔という範疇〕における指し示されるものである<sup>23)</sup>」という含みを忘れてはならない。すなわち、アウグスティヌスは *dictio* - *dicibile* の対によって、ストア学派の概念を翻訳したのではなく、「言語記号」という新しい分析対象を設定したと言えるのである。

#### 4. 2 アウグスティヌスの言語記号の概念

このように、「言葉は記号である」という根本理念に基づいて、アウグスティヌスはその二重性についてさまざまなかたちで論証しているが、「記号 *signum*」の定義と思われる記述も残している。このラテン語の *signum* という語は、語源辞典によればキケロによって定義されている<sup>24)</sup>ので、まずキケロの定義から確認しておこう。キケロは『発想論』において論証について分析するなかで、説得的に示す手段として記号を挙げ、記号とは「感覚が認め、そこから必然的に引出される推定を示唆するようなもの<sup>25)</sup>」であると記している。すなわち「記号」とは感覚のもとにあり感覚から得られたように思われる何かを意味するものである。この一節に記号の二重性が明示されているとは言い難いが、二つのこと、すなわち「感覚」と「感覚から得られるもの(何かを意味するもの)」が記号の内に示唆されている。次にアウグスティヌスの定義であるが、『キリスト教の教え』のなかで記号について次のように記されている。

……しるしとはそれが諸感覚にもちこむ像の外に、なにかそれとことなるものを、それ自身によって思惟の中へともたらすものである。

*Signum est enim res, praeter speciem quam ingerit sensibus, aliud aliquid ex se faciens in cogitationem venire...*<sup>26)</sup>

ここでは、明らかに二つのことが指示されている。つまり感覚へともたらされる「像 (*speciem*)」と、思惟へともたらされる「それとはことなるもの」である。

このようなアウグスティヌスの記号原理について、アリストテレス、ストア学派の言語哲学の伝統を踏まえた記号論という観点から、『キリスト教の教え』の翻訳者である加

藤はその読解を試みている<sup>27)</sup>。加藤は、上に引用したアウグスティヌスの定義のなかの「*cogitatio* (思惟)」に注目し、『キリスト教の教え』におけるその諸相から、「*cogitatio*」には「単にあれこれと思いをめぐらすとか、対象を思考するというのでなしに、創造的想像力として超越する力」があると解釈する。そして、聴衆が持つ「*cogitatio*」の設定が見出せることから、アウグスティヌスの記号論にはそれまでの伝統的な二肢構造を超えた三肢構造が認められ、さらに言えば、「記号を与える人」<sup>28)</sup>の存在も秘められており、四肢構造としての設定も可能だと述べている。すなわち、これはコミュニケーションの基本構造であり、加藤はシモーネを援用して、アウグスティヌスを言語学史上「最初の意味論分析を行なった」人物として位置づけている。そこで「*cogitatio*」の分析に戻るのだが、加藤は、*cogitatio* が *animus* に置き換えられたことを除けば大きな違いの見られない同種の定義をアウグスティヌスの『弁証論』に見出した後<sup>29)</sup>、次の一節からそのことばの構造を読み取ろうとしている。

耳でなくて、精神〔アニムス〕がことば〔ウェルブム〕からうけとって、精神そのものの中にとりこむものはディキビレ (*dicibile*) と呼ばれる。ところが、ことばがそれ自身のためでなく、それ以外のなにかを指し示すために発せられるとき、ディクティオ (*dictio*) と呼ばれる。ことばでもなく、精神〔メンス〕の中ではらまれたことばの観念 (*conceptio*) でもないレースそのものは、それがそれによって示すことのできることばをもっていようといなかりと、それは名辞の本来の意味でレースと呼ばれる。<sup>30)</sup>

ここで、四つの項 (ことば *verbum*、ディクティオ *dictio*、ディキビレ *dicibile*、レース *res*) が言葉の構造として設定されているのがわかる。ディクティオ (*dictio*) は、言葉が何かを指し示すために発せられたものであるから、音声的なものすなわち感覚的なものであり、ディキビレ (*dicibile*) は言葉から精神が受けとって自身の中に取り込むものである。この記述から、ディクティオ (*dictio*) とディキビレ (*dicibile*) は、前節で述べたとおり、「語」という範疇における「指し示すもの／指し示されるもの」の対概念に相当することがわかる。『弁証論』が執筆されたのはおおよそ 387 年であるから、『教師』(389 年) 以前に書かれたのは間違いないが、まして『キリスト教の教え』(397 年) から見れば最初期の作品に値する。加藤は、ジャクソンを援用してこのディキビレ (*dicibile*) が『キリスト教の教え』においてコギタティオ (*cogitatio*) に深められたと見ている。「あることばを聞くとディキビレが、そのことばが分ったときに生れるのだから、伝達にあたってうけとられたディキビレは叡智的对象 (*intellecta*) を思い浮べる一つの例であると、言ってもまちがいでなかろう。ディキビレはなんらかの意味でコギタティオの内容なのである」<sup>31)</sup>。

## 5. おわりに

記号 *signum* とは「何かを指し示すもの」であるが、アウグスティヌスは言葉という記号を「教える／学ぶ」という二つの観点から考察した。「教える」とは記号を用いて何かを指し示すことに他ならないが、記号は記号しか指し示すことができない。他方、「学ぶ」過程で記号によって指し示されるものの分析からは、指し示される記号が「知識」であることと、そこに潜む二重の実態が明らかにされている。アウグスティヌスがメタレヴェルの概念を見分けて一般化したのは、「記号 *signum*」が「音声的なもの *verbum*」と「精神的なもの *nomen*」から構成されているというモデルである。ここでは *signum* はもはや何かを指し示すものという一般的な概念から区別され、二重の構造を持った「言語記号」を指す特殊概念を獲得している。この図式の背景には、『教師』よりもわずかに早く書かれたとされる著作『弁証論』に見いだされる言語記号の構造が据えられているように思える。『弁証論』における *dictio - dicibile* という対立概念は、「語」を分析の最小単位として「指し示すもの／指し示されるもの」を表そうとした対の用語である。この対は、言葉の構造を示した「言葉 *verbum*」「ディクティオ *dictio*」「ディキビレ *dicibile*」「レース *res*」の四つの項の関係において定義されているが、これは、『教師』における四つの項すなわち「記号」「記号の知識」「实在の知識」「实在」に置き換えることも可能なのではないだろうか。アウグスティヌスはさらに認識に至る記号を「音」と「意味」の組み合わせとしても語っているが、両者は不可分であり一方のみではアウグスティヌスの「言語記号」は成立しない。そして「学ぶ」とは精神における知的な作業がもたらすものであり、従って「意味」は知的なものでなければならない。アウグスティヌスが繰り返し述べてきた記号の二重性からも、「意味」が「知性」と別のものではないのは明らかである。「ディキビレ *dicibile*」は『キリスト教の教え』において叡智の対象としてのコギタティオ *cogitatio* へと高められたと考えられているが、『教師』をその過程的思索と位置付けることも可能だろう。「教える／学ぶ」は知的な行為であるが、記号とは本来「指し示すもの」でしかない。『教師』の半ばでアウグスティヌスも指摘するように、厳密に言えば「教えること」と「指し示すこと」は同じではなく、それゆえ記号は「指し示す」すなわち「想起させる」ことしかできない。「記号」が刺激を与え観想によって知的探求がなされてこそ人は学ぶことができるのである。「記号に依らずして教えることはできない」「記号からは何も学べない」。『教師』を貫くアウグスティヌスのこのパラドクスは、このような「言語記号」の原理に基づいていたと考えられる。

## 註

- 1) 参照文献：アウグスティヌス『教師』、茂泉昭男訳、『アウグスティヌス著作集 2』、教文館、1979年、pp.199-278。 / Saint Augustin, «De Magistro», in *Œuvres de Saint Augustin 6*, texte de l'édition Bénédictine, traduction, introduction et notes de F. J. Thonnard des Augustins de l'Assomption, Paris, Desclée, 1952, pp.7-121.
- 2) 同上、p.208。 / *ibid.*, p.18.
- 3) 同上、p.208。 / *ibid.*, p.22.
- 4) ex は「一から」という分離の意味を持つ前置詞で、アデオダトゥスはいくつかの例文を挙げて説明している。同上、p.210。 / *ibid.*, p.24.
- 5) 同上、p.215。 / *ibid.*, p.30.
- 6) この作品における内容の区分けは、さまざまな議論がある (cf. G. Madec, «Analyse du *De Magistro*», in *Revue des études augustiniennes*, XXI, 1975, pp.63-71) が、本稿では底本としているデクレ版の訳者 F. J. トナールの区分けに基づいている。
- 7) 言葉によって指し示される記号ではないことがらを区別するため便宜上〈〉で示すことにする。
- 8) 前掲、アウグスティヌス『教師』、p.228。 / *op.cit.*, Saint Augustin, «De Magistro», p.48.
- 9) 同上、pp.225-226。 / *ibid.*, p.44。 この派生関係に関しては、語源的に誤りであることが確認されている (*ibid.*, pp.482-484, notes complémentaires 5 参照)。
- 10) 同上、pp.227-234。 / *ibid.*, pp.46-56 参照。
- 11) 同上、p.249。 / *ibid.*, p.78.
- 12) 加藤武『アウグスティヌスの言語論』、創文社、1991年、pp.211-212。 二人の res に対する解釈の違いについて指摘されている。
- 13) 前掲、アウグスティヌス『教師』、pp.262-263。 / *op.cit.*, Saint Augustin, «De Magistro», p.96.
- 14) 同上、p.262。 / *ibid.*, p.96。 ([ ] 内は筆者が補った)
- 15) 同上、pp.213-214, 255-256。 / *ibid.*, pp.28-30, 86.
- 16) 同上、pp.259-261。 / *ibid.*, pp.92-94.
- 17) 同上、pp.268-269。 / *ibid.*, p.106.
- 18) アウグスティヌスの照明説に関しては「De Magistro», notes complémentaires 2 参照 (*ibid.*, pp.477-479)。
- 19) 同上、pp.271-274。 / *ibid.*, p.110-114.
- 20) 以下、西欧の伝統における「記号論」「言語論」に関しては、ウンベルト・エーコ『記号論と言語哲学』(谷口勇訳、国文社、1996年)を参照した。
- 21) ストア学派の記号論的区別は厳密に言えば、σημαινον (表現) / σημαινομενον (内容) / τυγχανον (指示対象) の三つであるが(前掲書、ウンベルト・エーコ『記号論と言語哲学』、pp.66-70 参照)、ここでは古代における言語理論の発展という観点から、前者二つの区別を重視した。
- 22) 以下、古代の言語記号の分析について、M. Baratin and F. Desbordes, *L'analyse linguistique dans*

---

*l'antiquité classique, I : Les théories*, Paris, Klincksieck, 1981、および、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（中）』、加来彰俊訳、岩波文庫、1989年、7巻第1章40-73を参照した。

<sup>23)</sup> *op.cit.*, M. Baratin and F. Desbordes, *L'analyse linguistique dans l'antiquité classique*, p.55.

<sup>24)</sup> A. Ernout & A. Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine – Histoire des mots*, 4e éd, C.Klincksieck, Paris, 1967, p.624.

<sup>25)</sup> キケロ『発想論』、片山英夫訳、『キケロ選集 6』、岩波書店、1999年、pp.38-39。原文は以下のとおり：“*Signum est quod sub sensum aliquem cadit et quiddam significat quod ex ipso profectum videtur, ...*” (Ciceron, *De l'invention : texte et traduction*, texte établi et traduit par G. Achard, Paris, Les Belles Lettres, 1994, p.100)。

<sup>26)</sup> アウグスティヌス『キリスト教の教え』、加藤武訳、『アウグスティヌス著作集 6』、教文館、1988年、pp.79-80。 / Saint Augustin, «*De Doctrina Christiana*», in *Œuvres de Saint Augustin II*, texte de l'édition Bénédictine, traduction, introduction et notes de M. le chan. G. Combès et de M. l'abbé Farges, Paris, Desclée, 1949, p.238.

<sup>27)</sup> 以下、アウグスティヌスの記号原理について、加藤武による『キリスト教の教え』の解説（同上、pp.356-365）を参照した。

<sup>28)</sup> 『キリスト教の教え』第二巻の冒頭で、「意志的な記号」と「無意志的な記号」を分類した後、前者についてアウグスティヌスは次のように記している：「……つまりしるしを与えるとは、しるしを発信する人が心に抱いていることをとり出して、他者の心の中に移し入れることに他ならない」（同上、p.81）。

<sup>29)</sup> 「しるしとは、それ自身を感覚（センス）に、またそれ自身以外になにかあるものを精神（アニムス）に示すものである」という部分（同上、p.362）。原文は以下のとおり：“*Signum est quod et se ipsum sensui et praeter se aliquid animo ostendit.*”（同上、p.301）。

<sup>30)</sup> 同上、p.362.

<sup>31)</sup> 同上、pp.362-363